第十三回　ふるさと俳句コンクール

【教育長賞】　三点〔小一点・中一点・高一点〕

◇　寒空にぼくらを見守るおたけどん
新城小学校　六年　須賀　結麻

【選評】
垂水市には北は境小学校から、南は新城小学校まで８つの小学校があり、それぞれの学校には生徒たちの守り神が必ずいて、みんなを見守っているのです。
須賀君の通う新城小学校の生徒の数はむかしより少なくなりましたが、みんなの成長を見守ってくれる「おたけどん」がいるのです。

◇　素振りしてシュッと音鳴る秋の風
垂水中央中学校　一年　前原　栞奈

【選評】
夏の炎天下でのスポーツと言えば、まず一番に野球でしょうか。夏休みに頑張った練習の成果は、日焼けをした顔や腕を見れば明らかです。これからの地区大会に向けて自信もついて来たのです。
秋風を切る素振りの音は、試合での活躍を予想させてくれるのです。

◇　秋の日は千本イチョウ大笑い
垂水高等学校　一年　黒木　玲沙

【選評】
「千本イチョウ」と言えば、黄葉が風に舞い散る、または風にひるがえるというのが一般的な見方です。しかしこの作品の良さ、面白さはもう一歩突っ込んで「大笑い」をしている、と感じた（感動）ところにあります。
秋の日差しの中で風が吹いてくると、千本のイチョウたちは黄葉した葉っぱを震わせて大喜びしているのです。大変おおらかな作品です。

講評・今後に向けての指導

【小学校】
小学生の皆さんには、これからも季節の中で勉強したり、遊んだり、発見をしたりして「感動（かんどう）」してほしいと思います。
俳句には、気をつけなければならないことがあります。それは、垂水名物や垂水自慢を書くだけでは「標語（ひょうご）」になってしまうということです。俳句に「感動」を入れるようにすれば、素晴らしい作品になるのです。

【中学校】
今回、少し気になったのは、いくつかの作品に「記憶」、「なつかしい」など、過去形の出来事を俳句にしていることでした。決して悪いことではありませんが、中学生にしては「老成」が早すぎはしないか、と思いました。
俳句は一瞬の感動を切り取り、その感動を読む人にどれだけ伝えられるかという「新鮮さ」が売りの文芸でもあります。その意味では、過去形の言葉は相手に感動を伝えにくいのです。

【高等学校】
「季語」のほかに俳句の特徴の一つは、「五七五のリズム」を入れることです。最初は慣れないかもしれませんが、そのリズムが作品に生命を与えてくれるのです。絵画に額縁があるように、書道に半紙があるように、制約や決まりの中で勝負する楽しみが見えてきます。
また、高校生は自然のみならず社会や、人間関係、また自分との対峙などより深い洞察が始まる時期です。そんなことも俳句に織り込むように作ってみて下さい。